

英  
一  
蝶  
記

## 小 引

一蝶流謠に關する遺記として、世に山東京山の撰と傳ふる一蝶流謠考あり、既に續燕石十種第一に收められて居る。こゝに公刊する英一蝶記はまた前者に類して、一蝶流謠に關する雜記を輯録せるものである。のみならず、『一蝶が繪并系圖』の篇以下は寧ろ同系の一本と云ふべきもので、流謠考は是れに涼仙案を加へ、本書はこれに『源氏の繪夕顏の圖にそへし詞』の首章一篇を附載せるに過ぎない。元來流謠考は卷末に天保八年の年紀を有するが、當時京山が新に全編を輯録せるものとは考へ難く、寧ろ何人かの遺記に京山が案文、補記或は追記等を加記せるもの即ち流布本流謠考であらう。此の兩類本の異同より推せば、文政十年の斯本を直に流謠考の原本ならんとは推定し難く、或は別の一本あつて、此の兩本の互に傳寫し、また追記せるものと考ふべきであらうか。不幸にして今此の兩本の底本と思はれるものを見ないが、收むる所の朝清水記、四季繪の跋等は既に文化丑の年の序ある墨水消夏錄に見え、また前者は山崎美成の北峰雜襍に天明三年の跋ある同記を收め、本書所收の一蝶系圖は太田南畝の一話一言に録する。其他稍年次の下つた雜著中には筠庭雜錄、流布本浮世繪類考等に各單獨に引用された四季繪の跋がある。尙本書の各條はそれ／＼に類似の記敘を多數の隨筆雜著に見るが、是等の點より考ふれば本書の各章は、各嘗て何人かの著錄中に收められ、數次の傳寫の過程に、此の英一蝶記及び一蝶流謠考の底本が何人かに依つて輯録されたことを容易に想像し得やう。たゞ本書卷首に載する應齋が詞及び其れに附記せる牧野成著の案文のみは、他の著錄には全く所見が無い。唯僅に甲子夜話九十八に五十四帖圖の由來を略記せるに過ぎない。恐らく本書の筆者は文政十年の頃此の一篇を加記して、こゝに此の一部を編んだものであらう。

筆者牧野伊豫守成著に就いては、今是れを明にし難い。或は越中守成儀の後、成字を冠する牧野家の一族或は支族の一人でもあらうか。而して源氏繪分藏の條に牧野伊豫守とあるもの亦其の人なるべく、是より觀れば、成著が一蝶の畫技に傾倒せしも想察し得る。應齋に就いては文中、三河口太忠の別號とあるが、小川白山の筆錄と傳ふる蕉齋筆記寛政十年の記中にも是れを傳へて居る。たゞ其の人の伊豆日記は刊本ありと云ふが、未だ展開の機を得ない。

本書題簽は内容と一筆にて英一蝶記とある。文中『本ノマ、』等の註記あると共に誤寫脱字をも見ることは、無論斯本編著の後の傳寫本であらうが、書冊の體様よく整ひて天保以後多く下らざる頃の書寫と想像される。本書の大部が既に流謠考に録されて居るにしても總燕石十種本に比して誤寫少きと、成書として傳存せるが爲め、こゝに新に全冊を活字に移すこととした。

公刊に當つて一二の注意を云はゞ、文中(マ、)とあるは何れも校訂者の附註、また『島之圖』は朝清水記の次にあるが、今便宜に従つて形を改め、尙各島中記入の地名の位置を、印刷の便宜のため變更したこと及び本文は書流しの形を採つたこと等である。本書、家藏の一本、墨付十八枚、半紙袋綴本一冊である。(田中)

## 英 一 蝶 記

花一蝶在島中婦人の帷子に書きをける源氏の繪夕顔の圖にそ

へし詞

一蝶か繪并系圖

朝清水記并島繪圖

四季繪跋

帷子のゑりにしるせし應齋か詞

英一蝶は畫法を狩野某に學ぶといへども天性出群の才ありて萬世其妙を稱すそもいかなるゆゑありけるにやおほやけ罪をおかして此島にはなたる島にあるつれ／＼に圖しおけるを島一蝶と號して至翫とす此うすものに畫ける物一蝶か筆跡なるけにうたかふ所なきものなりいま此島の長菊地某か求に應してこゝにことはり侍る 應齋

この應齋かことはは八丈島の長菊地なるものゝつまの帷子のゑりにしるし置たるなり此うすものゝきぬに源氏のまき／＼を繪かきたる一蝶か筆はその家につたはりしを文政五とせの冬かの島にいたりぬる大野何某にあたへけるをあつまにありしゆかりのかたにをくりけるときゝつたへおなし十とせの夏のころ是をこひ得て見るに物語の中の十四卷をかきわけたる畫才よのつねのおよふところにあらすたちまちたれかれとわかちもとめて家々のたからとなせしものと興

ありてめつらかなり中にも此夕顔のまきはことにすくれてやさしくも猶あまりある筆のすさひそれかあらぬかと露をふくめる花の光にいとゝ黄昏の宿のあはれをそへぬるもかゝる妙手のなせるところとふかく感稱するにたえすかの一ひらのきぬをよそひして予か家の一珍にそなへたるはおなしとしのみな月なり

ほのみゑてめつるもふかしふりし世のたへなる筆の花の夕顔

伊豫守牧野成著しるす

按するに帷子のゑりにしるせし應齋か詞に一蝶此島にはなたるとあるはあやまりならんか菊地は八丈島の長なれば此島にはなたるとある時は一蝶も八丈に謫せしかと聞ゆ一蝶は元祿十一年十二月二日三宅島へ流され阿古邑といへる所にありしよしみつから作れる朝清水記にも我すむ阿古の浦山とあるをみてもうたかふへからす帷子は八丈島の菊地か家につたはりし事うたかひなきもの應齋か伊豆日記にも八丈島にならさらし帷子に源氏の繪を墨のみにていとこまやかに袖にも裾にも残る所なくゑかきたるあり又七福神の畫ゑひすの鯛をさしあけてまふ風情いとおかし松に鶴の二幅對なとみな三宅島にてかきたるなりとあれば帷子も三宅にてかき八丈の菊地かかたにをくりけるものなるへし又古松軒か八丈筆記に一蝶は八丈へも渡りしとて畫殘れりとあればもし八丈にて書たるものならんか詳ならさるなり應齋といへるは三河口太忠輝昌か別號なり應齋代官職にて官命をうけ寛政八年に伊豆の七島を巡視しける事ありてその時しるせし文を伊豆日記と號し公にもうち／＼御覽に備へたる事もありしなりこの帷子のはしにしるせし文も其時のことなりとしられたり 成著

# 島之圖



松平周防守殿伯父巴豆友翁方より三宅島へ流罪多賀長胡方（後英一蝶ト改）  
米三俵錢三貫文を贈る其節江戸にて時行ス唄を添遣す

## 唄に

久太郎町の春米や丸屋の手代の五兵衛主人の娘子慮外してなんにも慮外はしませぬか帶してしんしよといふたれはあんなおなかならんしためいよなはらしやへ

一蝶久しく島の住居こそいたせかよふなるいやしき唄はうたひ申さすとして返し

## 返唄に

日記にすくれし名所は丸屋の蘆のふしの間にうなはら遠きいさり船漁人の枝折へなんにも入江の夕榮に帶する富士の朝かすみア、心もうき島やめいよなはらしやへ

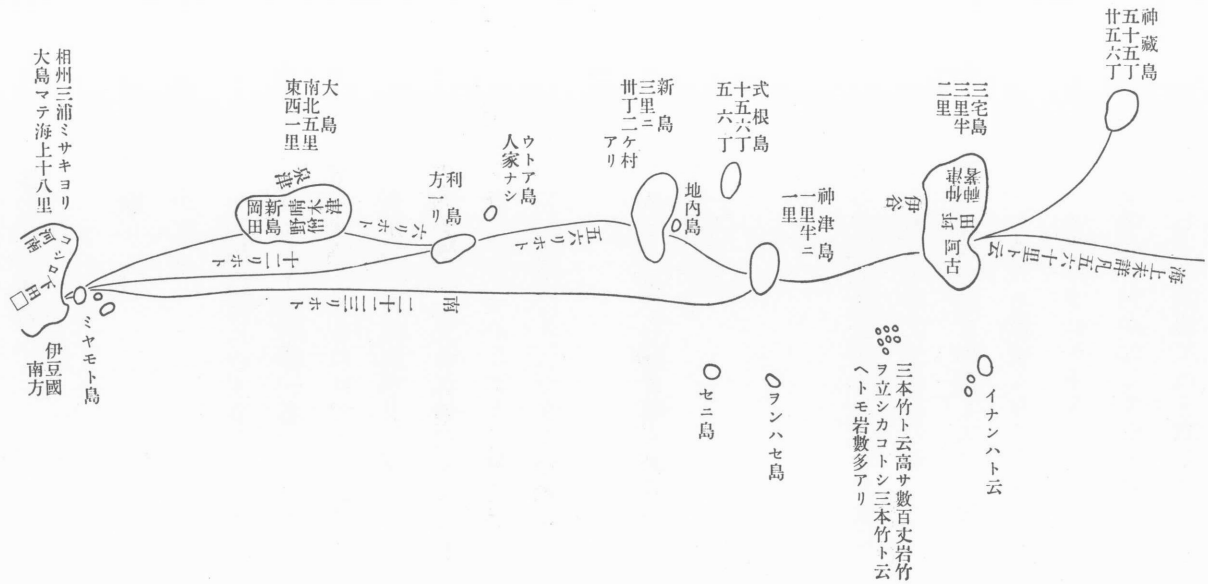
## 英一蝶傳并系圖

一蝶か傳諸書に記すを見るに大に誤か故に今其實を記す一蝶は浮世繪師にあらずとも時世の人物を畫き元師宜か畫風より出たるを以てしはらく  
浮世繪師に列す

英一蝶は承應元年壬辰攝州にて生ル姓ハ藤原多賀氏父ハ醫師也名を伯菴と云一蝶十五歳の時江戸に來り狩野安信の門人となれり名ハ信香一に安雄幼名猪三郎後次右衛門或は助之進と云朝湖と號す

翠蓑翁 牛丸幼名と云は非なり 曉雲俳諧の名なり 舊草堂 一蜂閑人後門人ニツツル

一閑散人 隣樵庵 鄰濤庵 北窓翁等の諸號あり



書を佐々木玄龍に學び後一家の風をかけり俳諧は芭蕉の門人にして其角嵐雪と友たり俳諧の名を曉雲また和央といふ一作和應又一説ニ和翁ト書テ別人ナリト云花街におゐてよひし名なりと云又薛國球君受等印あり元祿十一年戊寅十二月元祿八年トスルハ非ナリ吳服町一丁目新道に住居す謫せらるゝ時に年四十七歲謫居にあること十二年寶永六年己丑九月寶永四年トスルハ非ナリ歸郷せり其後英一一説花房母姓ナリ一蝶と稱し北窓翁と號す深川靈巖寺のうしろ海邊新田に宜雲寺といへるあり此寺に住けるよし一蝶か筆多く残れりとて世の人一蝶寺と云とそ享保九年甲辰正月十三日没す年七十三本榎日蓮宗承教寺塔頭顯乘院に葬墳あり法名英受院一蝶日意辭世まきらかす浮世の業の色とりもありやと月のうす墨の空 一蝶一蝶に老母一人あり剃髮して妙壽と云蝶謫居にある間蝶か友人横谷次兵衛宗珉宗珉か居檜物町にあり家にやしなはる正徳四年甲午三月晦日没す顯乘院に葬法名本是院妙壽日量

高嵩谷藏板

英氏系圖之略

英一蝶 門人養子續師家

一舟 名信種號東窓翁俗稱彌三郎明和五年正月十七日沒顯乘院葬

二代目 一蝶 名信勝俗一蝶晩稱長八年門人

一水 後高之ト更ム本姓佐脇名道賢字子岳號昇々觀號中岳堂又東宿一翠齋等ノ號アリ俗稱甚内明和九年七月六日沒年六十六

二男

一蜩 俗稱百松後源 門人一蜂號春窓翁 高嵩谷

嵐雪撰其袋元祿三年板に一蝶か句あり

花に來てあはせはおりの盛かな 曉雲

此句其角か花つみにも載たり

朝寝して櫻にとまれ四日の雛 同

自畫讃の句あまたあり舉盡しかたし

一蝶に小歌の作おほし元祿六年板松の葉にのするしのゝめと云小歌は一蝶の作なり洞房語園にはみしかよの早歌一名かやつり草と名つけて是をのせたり淺妻舟の讃も其頃ふしをつけてうたひけるにか松の葉にはうたの部にのせたり寶永のころの寫本よし原つれゝといふものにかやつり草などの朝湖か歌こそ又あはれなることおほかんめれと云々或説に一蝶聲からよくてみつからこと小歌をうたひけるよし老人になりても紀伊國屋文左衛門などにつきて花街にのみくらしたとなればさもあるへし

三谷何某一蝶か謫居より母のもとへ贈りし繪を藏す謫居のおもむきをこまやかに畫きたるなり 横谷宗珙の家にこのものとす

### 朝清水記

唐土に貧泉あり和朝に紀の路の毒水あり近江のや醒か井關の清水大原や清和井關の清水なと代々の歌人のめてたき言の葉のこゝろふかしされは往昔の伶聘人たはれんも我此島の浪のはなれ鶉とははなたれ來らずや灘の汐燒蟹の衣はきても見すや残れる歌枕もなくとまれる日記もみえずひたすらに神の産給へる島のそれかまゝの名所とて柁のかつら傳へきぬれと鳥の跡せし文字もさたかならす山木森々たれ共流るゝ川もなし湛たる池もすくなし一島水涸てたゝ窓もるしつく雨の

あしたの潦渴れはたすを忍へるたよりとなれり實やおほやけのかしきおきてことにかく罪あるをうつさるゝ地宜なるかな中に就てわかつむ阿古の浦山は猶あまさかる鄙の夷中路漁漁いさ樵しやう交り隣すれとも貢の鹽の跡にたくへて朝な夕な煙みちかく夜寒の床の明ることなししかはあれと致景五村に秀て朝に瞻みは天の原富士の高根幾島山の遠に聳へ白扇を逆にかくる東海の天と隠士丈山子へいか詩にも曾て聞法顯三藏の五天に漢朝の扇を見たりし心にかよひて古郷に詠め馴しかたみはこの山のすかたはかりそと潮に涙にひちまさる袂もうち覆ふ間に浪の煙立ふたかれる雲に髻髻として見えすなりもてゆくすでに夕陽浪にひたせるころ富賀今崎の釣舟をのかしゝいとみあひて家路にかへる款乃あいなの聲心を勞しむる媒ともなれり猿あらは叫へき山峽うしろにそはたち鶴あらは巢くふへき怪松門に存せり月雪の眺望あはれ罪なくてみまほし松の木柱竹を編る垣不破にあらぬ茅庇あれゆくまゝに守り捨て夏待宿の生瓢雨に軒ふくいやすたれ簾にちかき岩蟬に藤蘿を傳へる飛瀧をみつ是や嵇康か山澤の水に元芝か黃州の竹をもとめて晝夜を捨ぬ篋をうけたり杜子か浣花溪に謫せられて奴僕か運ふ巫峽の水消渴の疾を□へて竹竿濃々として細川流ると作れるなとあましまし流泉啄木の曲枕に傳ふ松の風蕨いばらか中を潜る水のみさほに落る竹の滴り彼に恥彼を友とす予はもと武陵畫工の庸人されは三日詩をいはされは口荊蕨くちけいきよくを含と年月の手なれ草も忘草に根をかへて朽木かきの跡の如くにきえもてゆくもはかなしやせめてはと巨勢千枝の古き跡を尋まほしきに彩種いろしづめ寛るに疎ければ丹青器に筆紙机に絶ぬ高然ねんき暉か重れる山李唐か野飼の牛も目前に見侍に馴行ふことの靜なるにつ

けては捨へき時口術をも得ぬへきかそふれは齡半白に向として懶惰  
日にそひてまさり斧をとり鋏をうつ勢ひもなければしはし世わたる  
ことわさに鄙吝欺言の商家となりて漸一字の賡を築き其中に陶朱公  
か富貴をこめて伯倫か酒陶潜か米をかさね樵夫か糶に宛て漁叟か蓑  
に貸する時は徐福か船をたのめて蓬萊に不死の藥を待捨る時孫晨か  
一束の藁をも貯へす胡蘇臺島棲て阿房狐の時に空し篋も竹朽な水  
は岩根の主となりて幾世へぬへき

埋むへきうき身はいかになからへてけふまでむすふ苦の下水

干時元祿 壬午春

散人牛磨執筆  
阿古邑茅舎

右朝清水記一卷牛磨散人とは畫工一蝶が遠き島邊の栖に於て書つ  
らねつゝ不二の繪にそへて傳へたり多賀孤雲一蝶の孫なり  
りうつしえられしよし武濟のぬしの箱にひめ置れるをうつし置  
物也

元祿の御船手逸見八右衛門記錄之内書付あり左の通

吳服町壹丁目新道  
勘右衛門店

多賀朝湖

四拾貳歳

北條安房掛り

元祿六年酉八月十五日

是者御詮儀之儀有之候ニ付安房守宅より揚屋江入

右之者元祿十一年寅十二月二日三宅島江流罪御船手逸見八右衛門方

英一蝶記

江渡ス

寶永六九月

大赦ニ依テ歸國

元祿六年酉八月十五日入

村田半兵衛

本銀町貳丁目  
次郎左衛門店

佛師民部

本石町四丁目  
茂左衛門店

江渡ス

是者朝湖一件之者ニ而御詮議有之候間安房守方より揚屋江入  
右之者共元祿十一年寅十二月二日八丈島江流罪御船手逸見八右衛門

御留守居

柳生主膳正同心

喜十郎事

大野應助

午四拾四歳

右之者文政五年九月廿五日遠島被申渡同年十月廿五日八丈島江流  
罪

此者八丈島之長菊地何某に英一蝶か源氏の繪をゑかきし婦人の帷  
子を貰受文政十年春の頃江戸に有し婦なる者方に送りけるをこひ  
求て其品々をわかし得るものは

空蟬 夕霧 椎本

佐野肥前守

夕顔

牧野伊豫守

鈴虫

酒井但馬守

小蝶

能勢靱負佐

橋姫 浮船

大島飛驒守

明石

平岡越中守

桐壺

村越伯耆守

四七

須磨

中島三左衛門

柳

根岸九郎左衛門

若紫

關傳悦

帚木

菅沼林齋

右家々の寶となして珍藏するもの也

文政十丁亥年六月

成著記

#### 四季繪跋

夫大和繪はそのかみ土佐刑部大輔光信かすさひに堂上のうや／＼しきより田家のふつゝかなるさま岩木のたゝすまひやり水のめいほくこれにはしまりて末々に流れ予か如きのつたなきまでこれをことゝす近頃越前の産岩佐の某となんいふもの歌舞白拍子の時勢粧ひをのつからうつし得てよの人うき世又兵衛とあた名す久しく世に玩ふに又房州の菱川師宣といふもの江府に出て梓におこし世こそつて風流の目をよろこはしむ此道予か學びこのむ所にあらすといへとも若かりし時あたしあた浪のよるへにまよひしくれ朝歸りのまはゆきをいとはさるころ同行岩佐菱川か上にたゝんことをおもひてよしなきうき名の根さし残りてはつかしのもりのしけきことくさともなれりさるか中に事にあたりて謫居にさすらへしこと十とせにあたり二とせに近きをありかたき御めくみのめてたきことこのみやこにかへりきぬある人むかしの筆の四時のたはふれ繪をふたゝひ予に見す其頃は心たくましくまなこすゝろに髪すす<sup>本マ</sup>すをち筋にわくことはさもことたらさりけらししかし今の世のありさまにくらふれは髪のとゑり

をこへすふり袖大路をすらすたゝあまさかる田舎女のすかたゑとも思ふへからん螢雪うつりかはりてこの二卷<sup>マ</sup>をみることうら島か七世のうまこにあへるためしにひきてかつは歌をそふるこゝろにて是かために跋す

英一蝶書

これは一蝶か島よりかへりけるのちある人のもとめによりてむかし繪かき置たる四季の繪のおくに書くはへたる言葉なればこゝにしるし置ぬ

成著